

資源増大技術開発事業（マダラ）

（要約）

松坂 洋・山田 嘉暢

I 種苗生産技術開発

1. 幼稚仔育成技術

- (1) L型シオミズツボワムシの大型水槽による再度粗放培養を試み、昨年度より長期間の間引き培養が可能であった。
- (2) 冷凍コペポーダが餌料として有効かどうか56日令の稚魚で小型水槽による飼育試験を行った結果、嗜好性は低く、単独給餌ではほとんど摂餌できず、使用法に問題が残った。
- (3) 量産試験では飼育して2週間頃からの初期減耗と、70日前後から始まった異常浮上による減耗が発生し、昨年度よりは多かったものの7.88万尾の生産に止まった。

2. 中間育成技術開発

昨年度と同様に生産が遅れたものの成長が良好であったため、中間育成は1ヶ月以上行うことができた。しかし、冷凍コペポーダの使用により昨年度と同様に配合飼料への餌付きが思わしくなかったことから、配合飼料に加え、冷凍ヒラメ受精卵、冷凍コペポーダ、イカナゴミンチの給餌を行い飼育した。その結果、当初の7.88万尾から7.34万尾（生残率93.1%）の放流用種苗を育成した。

この種苗7.34万尾に加え、脇野沢村漁協で生産した種苗1.2万尾の合計8.56万尾を脇野沢村鯛島沖にH14年6月10日および6月19日の2回に分けて放流した。佐井村漁協で生産した種苗1万尾はH14年6月14日に佐井村沖に放流した。

II 放流技術開発

放流効果調査

平成14年度漁期に再捕された腹鰭切除のマダラ標識魚は2尾（平成9年、平成10年放流群）で、平成9年および10年放流群の累積再捕率は0.001%で、過去の放流群の中で最も低い割合であった。

III 関連調査

(1) 漁獲統計調査

平成14年度に脇野沢漁協に水揚げされたマダラは11.4トン、佐井村漁協牛滝では19.9トンで、依然戦後以降、最低水準にとどまった。

(2) 魚体測定調査

漁獲されたマダラは尾又長66～83cmまでのサイズが漁獲の中心を占めており、年齢では4才魚から5才魚と推定され、90cm以上の大型魚の割合は少ない傾向にあった。